

日交研シリーズ A-819
令和2年度自主研究プロジェクト
「新しいモビリティサービスと都市・地域のあり方」
刊行：2021年9月

新しいモビリティサービスと都市・地域のあり方
New Mobility Services and Desirable Form of Cities/Areas

主査：高見 淳史（東京大学准教授）
Takami Kiyoshi

要 旨

自動運転車（AV）やMobility as a Service（MaaS）などの新たな技術やサービスが登場しつつある昨今から近未来にかけての時期は、都市交通計画と都市計画にとって重要な転換点である。本研究プロジェクトはこの認識のもと、新技術・新サービスが人々の生活や都市・地域に与える影響の分析と、それを踏まえた計画論の検討をさらに進めることを目的として進めた。成果の中から本報告書に収録した内容は以下の通りである。

1章では、川崎市・新百合ヶ丘駅周辺地区を対象に、路線バスとオンデマンド交通が（ほぼ）乗り放題の状況にある時の利用者の行動や意識について、トリップダイアリーとインタビューによる調査・分析を行った。結果、上記の状況でも大半の移動で路線バスを利用する層が存在し、両手段の役割分担を適切に設計することの重要性や、地域に住み続ける上でこうしたサービスが一つの鍵となりうることについて示唆を得た。

2章では、AVが広く普及しシェア型AVサービスが存在する条件下での自家用AV購入選択と交通手段選択に関するSP調査データをモデル化し、選択要因を明らかにするとともに、各種シェア型AVサービスの時間価値を推計した。成果は今後エージェントベースシミュレーションに組み込むなど、種々のシナリオ評価に活用可能である。

3章では、大都市圏郊外住宅地で実施されたオンデマンド交通実証実験の利用ログデータを用いて、交通利便性や利用時の遅れ経験などの変数で個別利用者の利用回数を説明するモデルを構築し、利用水準に影響する要因と影響の程度を明らかにした。

4章では、MaaSパッケージの構成要素として情報提供や決済を一体的に担うスマートフォンアプリ、路線バス乗り放題権、タクシー上限付き乗り放題権などを想定した選択型コンジョイント分析により、各構成要素が持つ経済的価値の定量的評価を試みた。

キーワード：オンデマンド交通、自動運転車、Mobility as a Service

Keywords : Demand-Responsive Transport, Autonomous Vehicle, Mobility as a Service